

## 明治期の唱歌教育と国民形成：ジェンダーの創出に 視点を置いて

佐藤，慶治  
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1955354>

---

出版情報：総合文化学論輯. 3, pp.13-24, 2015-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：

# 明治期の唱歌教育と国民形成 —ジェンダーの創出に視点を置いて—

佐藤 慶治

## 1. 本研究の目的・章立て・意義と導入

### 1-1.

本論文は、「ジェンダーの創出」に視点を置き、明治期における学校音楽教育、すなわち唱歌教育と、当時のジェンダー観との関連性を論じるものである。現代の日本社会では、1999年に公布・施行された「男女共同参画社会基本法」の下、学校教育においても各種の男女平等教育が実践され、過度なジェンダーフリー教育が問題視されることさえあるが<sup>1</sup>、戦前の日本における学校教育では、それとは逆の、端的に言えば男女におけるジェンダーの違いを強調する教育が行われていた。ここで言うジェンダーとは生物学的性ではなく、社会科学における「社会的・文化的に形成される性」のことであり、本論文では、明治期の唱歌教育がどのような形でジェンダーの創出と関わっていたかということを分析する。まず導入として、本章後半で唱歌教育の最初期を纏める。第2章では、初期唱歌教育において大きな影響力を持った教科書である『小学唱歌集』の歌詞について、「翻訳唱歌」の分析を通じ、日本で後付けされたジェンダー要素を論じる。第3章では、『小学唱歌集』刊行の中心人物であった伊澤修二が後年に編纂した唱歌集『小学唱歌』について、伊澤の考えていた男女それぞれのジェンダー観を、それぞれの性別を対象とした唱歌の歌詞から導き出す。ジェンダーを中心として唱歌教育を分析した研究は少なく、特に『小学唱歌』に関しては、巻毎に教育対象の性別を指定しているという、ジェンダー研究から見ても重要な特徴を有しているにも関わらず、これまで歌詞を中心に論じた研究はほとんど存在していなかった。二種類の唱歌集の歌詞についてジェンダーの視点から分析することにより、明治期のジェンダー観の特徴をも論じる。

### 1-2.

明治期における唱歌教育は、まず1872年、近代的学校制度を定めた日本最初の教育法令である「学制」が公布された際に、一教科としての「唱歌」が定められた。この時点では教科書や実際の指導者もなく、全くの有名無実な教科であったが、最初の試みとして1878年に、京都女学校が唱歌集の先駆けである『唱歌』第1編を出版した。ここには地歌の歌詞のみを、「君が代を祝うこと」や「親に従い姉妹仲良く暮らすこと」などの教育的な内容に

変えた15曲が収められている。また、同じく1878年、東京女子師範学校附属幼稚園でも、宮内省式部寮雅楽部によって作られた『保育唱歌』が使われ始めた。この二つの唱歌集は、その後の学校教育でほとんど使用されておらず、後世に影響を残したとは言いがたい。しかし、ここで重要なのは、最初期の唱歌教育における先駆的な試みが女学校から始まったということである。その理由について音楽学者の細川周平は、この時代、「唄が第一に女子ども（と河原者）のものという江戸時代の社会通念があり、唄がまず感化できるのは女であると考えられていた」ためと論じている<sup>2</sup>。実際、文部省が1876年に出版した『教育雑誌』の第3号には、唱歌教育に関し、「女子ノ言語ヲ正クシ、且其風教ヲ増進ス元来女子ノ性質ハ軽浮ナル者ニシテ専ラ華飾ヲ好ムヨリ或ハ漸ク其心性ヲ蘊逸シテ怠惰淫癖ニ陥シムノ弊アル幼ヨリ之ヲ教ヘテ軽浮ノ氣象ニ克タシム」<sup>3</sup>と記述されている。女性は、もともと軽薄な性質であり、怠惰で派手好みなため、幼いうちから正しい音楽で躰ける必要があるということで、この時点では唱歌教育の主な対象が女性であったことがうかがえる。その後1879年に、文部官僚の伊澤修二を中心として、学校音楽教育の研究—西洋音楽の取調を行う目的で文部省音楽取調掛が創設された。設立の前年まで米国に留学していた伊澤は、留学時代にプライベートで音楽のレッスンを受けていたルーサー・ホワイティング・メーソンを、1880年に音楽取調掛の指導者として日本へ招き、1881年から1884年にかけて、最初の官製唱歌集である『小学唱歌集』全三編を発行する。この時期は、鉄道などのインフラ整備や、様々な経済政策などが盛んに行われていた時期であり、唱歌教育はそれらと並んで整備が行われていた、すなわち重要視されていたものと見なすことができる。司馬遼太郎の小説を基にしたNHKのテレビドラマ《坂の上の雲》の第1話冒頭では、明治初期の日本人を指して、「日本人は初めて近代的な国家というものをもった、誰もが国民になった」<sup>4</sup>という説明がなされるが、明治維新でいきなり誰もが「国民」としての自覚を有した訳ではなく、明治期を通じて学校教育などによるナショナル・アイデンティティ形成が行われたのである。唱歌教育が期待されていたのはまさしくその点においてであり、主として歌詞の意味内容で人々を感化するという、歌の機能が重要視された。

## 2. 『小学唱歌集』の成立とジェンダー的内容

『小学唱歌集』は全三編において全91曲の楽曲を掲載しているが、そのうち81曲が外国語楽曲に日本語の歌詞をつけた「翻訳唱歌」と呼ばれるものであり<sup>5</sup>、『小学唱歌集』の場合、主に英米とドイツの民謡や賛美歌、教育用唱歌を原曲としている。この「翻訳唱歌」の歌詞に関しては、「原曲の歌詞を翻訳し、次いで曲を分解して、日本の伝統的な詩の形式に従って作詞しやすくした上で、分解した曲に合わせて歌詞の修正を加えた」とされてい

る<sup>6</sup>。つまりは、翻訳というより日本の文脈に合わせた翻案が行われており<sup>7</sup>、唱歌歌詞と原曲歌詞を比較分析することによって、音楽取調掛が後付けした歌詞内容、すなわち当時の日本における学校教育上、必要とされた教育的要素を導き出すことができる。

## 2-1.

前述の細川は、伊澤の業績の一つとして、「唱歌を男も含む子供全員の徳育に利用しうることを主張し、実行したこと」を挙げている<sup>8</sup>。これは、「今夫レ音楽ノ物タル性情ニ本ツキ、人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙用アリ。故ニ古ヨリ明君賢相特ニ之ヲ振興シ之ヲ家国ニ播サント欲セシ者和漢欧米ノ史冊歴々徴スベシ」<sup>9</sup>という『小学唱歌集』の緒言からも読み取ることができる。社会学者の上野千鶴子は、「『国民』は『国家のために死ぬ名誉を持つ者』と『国家のために死ぬ名誉を持たない者』とに分断され、前者だけが国民の資格を得たのである」として、「兵役」を「国民化」の鍵に位置づけており<sup>10</sup>、この言説に基づいて考えるなら、1873年の「徴兵令」で男性にのみ兵役が課されていた明治期日本においては、男性こそが「国民」の主役であったと言えよう。『小学唱歌集』でも男性の「国民」を歌った歌がいくつか含まれており、「益荒男」など明らかな歌詞が含まれているものとして第42曲《遊獵》、第44曲《皇御国》、第61曲《古戦場》、第69曲《小枝》、第77曲《忠臣》の5曲が存在する。このうち《遊獵》の歌詞について、原曲訳詞と比較する形で以下に記す<sup>11</sup>。

### 《遊獵》

一さながら山も、くずるばかりに、おのえにとよむ、矢玉のひびき、神ちょう  
う虎も、てどりにしつつ、いさみにいさむ、益荒雄の徒、  
二葦毛の馬に、しづ鞍おきて、あづさの真弓、手にとりしばかり、みかりた  
すは、ますらおなれや、み獵たたせる、そのいさましき、

### 《リンカンシャーの密獵者》<sup>12</sup>

- 1 私が有名なリンカンシャーで徒弟奉公をしていた頃、7年以上、親方に仕えていた。私が密獵に手を出すまでは。君はもう噂を聞いているのではないか。それは輝く夜の、私の喜び。一年のうちのシーズン中に。
- 2 私と仲間がわなを仕掛けているとき、私たちは油断をし、番人に見つかってしまった。私たちは格闘し、跳躍し、逃げおおせた。それは輝く夜の、私の喜び。一年のうちのシーズン中に。

原曲の《リンカンシャーの密獵者》は、イングランドの民謡であり、現在でも吹奏楽曲として親しまれている。歌詞は密獵生活の楽しさを描いた喜劇的なものであり、狩人の勇

ましさを歌った《遊獵》との共通点は、「獵」という主題のみに他ならない。唱歌歌詞の男性的な勇ましさは、明らかに日本における後付けであろう。明治後期には、唱歌から発展する形で生まれた学生歌や軍歌が盛んに歌われるようになる。これらの楽曲は、(実際は歌わせていたにせよ)もはや「女こども」を対象にした歌とは到底言えず、《遊獵》や《皇御国》はその先駆と見なすこともできるだろう。以下に《皇御国》の歌詞を記す。

#### 《皇御国》

一すめらみくにの、もののふは、いかなる事をか、つとむべき、ただ身にも  
てる、まごころを、君と親とに、つくすまで、  
二皇御国の、おのこらは、たわまずおれぬ、こころもて、世のなりわいを、  
つとめなし、くにと民とを、とますべし、

この楽曲は「翻訳唱歌」ではなく、伊澤自身による作曲のもの。作詞は一番と二番で分かれており、一番が幕末の勤王家である加藤司書、二番が音楽取調掛員の加藤巖夫によるもの。勤王の志士による歌詞ということもあって、私を捨てて君(天皇)や国に尽くすという自己犠牲の精神を歌ったものだが、同じ精神性は後の有名な軍歌である『海行かば』等にも見られる。このように、明治期の日本における男性ジェンダー観は、江戸以前の武士道のイメージも残り、「勇ましさ」や「自己犠牲」の精神性と結びついたものであった。

## 2-2.

ここからは女性ジェンダーの分析に移る。第一次伊藤内閣・黒田内閣の下で初代文部大臣を務めた森有礼は、1873年、福沢諭吉や中村正直らと共に、啓蒙活動を行う目的で明六社を結成した。明六社に結集した知識人達は、国家の形成において、いかに女性の力を利用するかを切実なる問題意識として抱えており、結成翌年より『明六雑誌』の刊行を開始する。1875年、この雑誌において、中村が初めて「良妻賢母」という言葉を使用した<sup>13</sup>。中村は、日本を近代国家として発展させる基本が「人民ノ性質ヲ改造スル」ことにあり、女性を「善良ナル母」として養成することがその近道になると考えていた。具体的には、「賢母」が子供の教育を担当することで「人類ヲ新タニシ改良」できるということであり、この「性質の改良」ということについては、「人心を正し風化を助ける」という目的を持った『小学唱歌集』に類似する考えとも言える。『小学唱歌集』において、タイトルや歌詞から明らかに女性をテーマにしていると見なせる楽曲としては、第21曲《若紫》、第31曲《大和撫子》、第56曲《才女》、第57曲《母のおもひ》の4曲が挙げられ、このうち《母のおもひ》はまさしく「賢母」像を歌ったものである。唱歌・原曲の順で、以下に歌詞を記す。

《母のおもひ》

一ははのおもひは、そらにみち、ゆくえもしらず、はてもなし、月の桂を、  
たおりてぞ、家の風をば、ふかせつる、あおげあおげ、ははのみいさお、  
二母のなさけの、撫子よ、つゆなわすれそ、めぐみをば、家をうつすも、そ  
だてぐさ、はたをきるさえ、教えぐさ、したえしたえ、ははのなさけを、

《私の愛する母》<sup>14</sup>

- 1 そこは私が子供時代を過ごした場所、私は思い出す。優しい音色の声が輝く妖精の話を語った。甘い言葉と優しき抱擁、それは私に喜びをもたらす。母の膝の上は、私の幸せな場所。
- 2 妖精の話は終わった。「お休みなさい」という柔らかな声、キスが私を眠らせる。私の小さなベッドで。そしてそこで、彼女は私に聖なる言葉を語る。私はまだ見える、彼女の天使のまなざし、閉じられ、私は母の傍らで眠る。

原曲の《私の愛する母》は、幼き頃の母との甘い時間を思い出す歌詞内容であり、唱歌では、そこに「賢母」や「母への恩」というスパイスを加えている。母の像を歌った唱歌は明治期を通じて多く作られており、この《母の思ひ》は、「賢母」を歌った唱歌の先駆と言えるだろう。1870年代後半より、天皇制中心の日本的近代化が模索され始めており、それは『小学唱歌集』にも表れている。その近代化戦略の中で、家族制度における女性一母の献身を、女性に徳があるから故として賞賛していく言説戦略がとられ、更には歴史上、国家に功績のあった女性を、日本女性の優越の象徴とすることが始められた。『小学唱歌集』において、この文脈上にあるのが《才女》である。以下、同様に歌詞を記す。

《才女》

一かきながせる、筆のあやに、そめし紫、世々あせず、ゆかりの色、ことば  
の花、たぐいもあらじ、そのいさお、  
二捲あげたる、小簾のひまに、君の心も、しら雪や、廬山の峯、遺愛の鐘、  
目にみる如き、そのふぜい、

《アニー・ローリー》<sup>15</sup>

- 1 マクスウェルトンの丘は美しく、そこは朝露にぬれている。あそこでアニー・ローリーは、私に真実の約束をくれた。これは忘れることのできぬもの。美しきアニー・ローリーのため、私は命を捧げよう。
- 2 彼女の顔は雪のようで、彼女の首は白鳥のよう。彼女の顔はもっとも美し

く、陽の光に満ちている。深い青色は彼女の瞳。美しきアニー・ローリーのため、私は命を捧げよう。

原曲は有名なスコットランド民謡の《アニー・ローリー》。これはウィリアム・ダグラス作詞の、アニー・ローリーという理想的な女性への恋心を歌った歌詞内容である。対して《才女》は、第一連で『源氏物語』の作者である紫式部、第二連で「香廬峰の雪は？」と問われて直ちに御簾を巻き上げ才知を示したという清少納言の逸話を歌っている。明治期、日本女性の象徴として、二人の女流作家が論じられる機会が増えた。例えば1894年の『文学界』第20号においては、清少納言が、誇りを持って宮中に仕えた貞節な女性として評価されている<sup>16</sup>。

### 2-3.

この章の最後に、男女両方のジェンダーを扱った楽曲として、第18曲《うつくしき》を挙げたい。以下に、これまでと同様の順で歌詞を掲載する。

#### 《うつくしき》

うつくしき、わが子やいずこ、うつくしき、わがかみの子は、ゆみとりて、  
君のみさきに、いさみたちて、わかれゆきにけり、  
二うつくしき、わが子やいずこ、うつくしき、わがなかのこは、太刀帯て、  
君のみもとに、いさみたちて、わかれゆきにけり、  
三うつくしき、わが子やいずこ、うつくしき、わがすえのこは、ほことりて、  
きみのみあとに、いさみたちて、わかれゆきにけり、

#### 《スコットランドの釣鐘草》<sup>17</sup>

- 1 ああ、教えて、あなたの高原の若者はどこへ行った？ 彼は柵引く旗と共に、気高き行為の行われる土地へと。そして、ああ、私は胸の中で、彼の無事なる帰宅を望む。
- 2 ああ、教えて、あなたの高原の若者はどこに住んでいた？ 彼は美しきスコットランドに住んでいた。そこには愛らしい釣鐘草が咲いている。そして私の胸の中で、私の若者がいないことを悔やんでいる。
- 3 ああ、教えて、あなたの高原の若者が殺されたらどうするのか？ いいえ、真の愛が彼を導き、無事に帰らせるだろう。もし私の高原の若者が殺されたなら、私の心は壊れるだろう。

原曲は、徴兵された恋人の帰りを待つ女性の恋心を歌ったスコットランド民謡。唱歌はそれを、「三人の息子を近衛兵として送り出した軍国の母の毅然とした心境を歌う、教育的な歌」<sup>18)</sup>に改変している。「勇ましき兵士」として天皇に仕える息子たちを、「賢母」が送り出す情景を描いており、正に明治期における男女それぞれのジェンダー観を併せ持った楽曲と見なせる。ここまでの分析から見て、『小学唱歌集』歌詞における男女それぞれのジェンダー像は、「勇ましく戦う男性像」・「賢い母である女性像」というものであった。歌詞以外の音楽的要素、すなわちリズムや調、旋律に関しては、男女それぞれのジェンダーを表している楽曲のみに見られる特徴は存在しない。タイトルを挙げた上記9曲のうち、《皇御国》のみが伊澤の作曲による雅楽調であるが、『小学唱歌集』には他に5曲の雅楽調楽曲が含まれており、この楽曲のみの特徴にはなっていない。

### 3. 『小学唱歌』と伊澤のジェンダー観

#### 3-1.

1886年、前年に初代文部大臣となった森が「第一次小学校令」を公布し、国家主義の勃興の下、教科書検定制度が始まる。これは地方の裁量に任せていたそれまでの認可制と違い、国家が教科書の基準を定めるものであり、「唱歌」においても1888年頃より検定を受けた民間の教科書が見られるようになる。伊澤は1891年に辻新次との意見の対立から音楽取調掛を非職となったが、翌92年から93年にかけて、自らの理想とする教科書、忠・孝の徳目を中心とした『小学唱歌』を編纂した。これは全6集で、1890年に発布された教育勅語に基づき、小学生徒の知徳体育を目的としている。伊澤の緒言に「第一巻、第二巻は、尋常小学に適用し、第三巻第四巻は、高等小学女生徒に第五巻第六巻は、高等小学男生徒に適用すべき歌曲を採れり」と記述されており、男女別の適性を意識していることが読み取れる。まずは、男女共通ではなく、それぞれの性別のみを対象とした楽曲の一覧を纏めたい<sup>19)</sup>。第3巻以降に掲載されている楽曲にも、複数の巻で男女共通に用いられている楽曲があり、そのようなものは除く。タイトル前の数字は、順に巻数・掲載番号である。

(女生徒向け：20曲) ③-4 《鏡》、③-6 《四季の景色》、③-11 《蛍も雪も》、③-13 《松下禅尼》、③-14 《夏》、③-15 《文読む人》、③-22 《慎言謙讓》、③-23 《君が門》、④-4 《学の力》、④-7 《母の恵》、④-9 《我宿》、④-10 《松の操》、④-12 《歌》、④-13 《身はたをやめ》、④-14 《小督》、④-17 《三秀》、④-21 《高き誉》、④-22 《絲竹月花》④-23 《皇国の四季》④-25 《京の四季》



(男生徒向け：18曲) ⑤-3 《行軍歌》、⑤-6 《臣の鑑》、⑤-12 《来れや来れ》、  
⑤-17 《日本男子》、⑤-19 《矢玉は霰》、⑥-3 《屯田兵》、⑥-5 《習へや》、⑥-7  
《礪山元》、⑥-8 《母の思い》、⑥-10 《海山》、⑥-11 《岩清水》、⑥-12 《四の  
時》、⑥-13 《今の世》、⑥-15 《尚武》、⑥-17 《商船》、⑥-18 《軍艦》、⑥-21 《古  
戦場》、⑥-24 《愛たの花》

音楽要素について、男子向けの楽曲が全て単旋律なのに対し、女子向けの楽曲では《蛭も雪も》、《文読む人》、《歌》、《絲竹月花》が輪唱形式になっている。また、《身はたをやめ》、《京の四季》、《鏡》、《君が門》が俗楽調であり、これもやはり男子向けでは見られない特徴になっている。伊澤は《身はたをやめ》の解説において、「教師、此曲ヲ、一二回、楽器ニテ弾シ、生徒ニ、何種ノ楽曲タルカヲ問ハバ、忽チ俗楽調ナルコトヲ答ヘン」<sup>20</sup>と記述しており、女子は俗楽調に親しんでいるのが好ましいと考えていたことがうかがえる。このような女子向けの楽曲は、二分音符・四分音符中心で穏やかな旋律の楽曲が多いが、逆に男子向けの楽曲では、《行軍歌》や《日本男子》など、軍歌の特徴であったピョンコ節が多用されている。しかし音域的な男女差は見られず、これはこの時代の男子小学生が、現代と違い、在学中に変声することがほとんどなかったという当時の事情を反映しているとも考えられるだろう<sup>21</sup>。

### 3-2.

ここから『小学唱歌』楽曲の歌詞について論じる。女子向けのものが「花鳥風月」、「勉強」を多く歌っているのに対し、男子向けのものでは軍歌的な内容がほとんどである。例えば、男子向けの楽曲だが、題名からすると一見、花鳥風月の内容とも思われる《愛たの花》の歌詞を見てみたい。

#### 《愛たの花》

一あはれや盛りのさくら、散るか散るかおしや、ちるよ嵐に散る花嵐に散る  
花、めでためたの花散るは惜しや  
二あはれやさかりのさくら、散るか散るか今はちるか、さながら降る雪さな  
がら降る雪、さそふ嵐の庭散るはめでた

一見すると花鳥風月の歌詞にも思えるが、伊澤の解説より、国家のため、桜の花の散るような自己犠牲を「めでた」と奨励する曲と分かる<sup>22</sup>。女子向けの楽曲では、四季や景物をタイトルに含めているものが複数あるが、こちらは実際に花鳥風月の内容を歌っている。例として、《京の四季》の歌詞を記載する。

### 《京の四季》

一花さく春は、東山、月すむ秋は、かつら川、鳥羽田の早苗、小野の雪、みやこにつきぬ、そのながめ

一連のみの歌詞であるが、その中で京都における美しい景物を春夏秋冬全て歌っている。女子向けの楽曲としては、このような花鳥風月のほか、《松下禅尼》のような、国家に功勞のあった実在の女性を歌ったものもある。

『小学唱歌』では日本人作曲の場合、作曲者が明記されており、西洋曲の場合は作曲者未詳と記されていることが多い。教育勅語に基づいた日本的な教科書というイメージから、敢えてそのようにしたという推測ができる。このことから「翻訳唱歌」はおよそ3割程度しか掲載されていないと考えられるが、その作成方法は『小学唱歌集』に近い。まずは、女生徒向けの《我宿》について比較分析を行う。以下に、唱歌・原曲の順で歌詞を記す。

### 《我宿》

一ゆかしく楽しき我宿、かはらぬすがたの花園、み親の涙のなさは遍し、  
ぬれては色ますもろ袖、ゆかしく楽しきわが宿、変らぬ姿のはなぞの  
二勇ましたのもし我宿、嬉しき言葉に尽きせず、かよわき板戸のひとへの隔  
ては、浮世の波風よそにて、勇まし頼もし吾宿、うれしきことばに尽せず  
三なつかし愛らし我やど、優しき情のみちみつ、手植えのめぐみにこたふる  
心根、笑顔を示せる艸花、なつかし愛らし吾宿、やさしき情のみちみつ

### 《地上の愛しき我が宿》<sup>23</sup>

- 1 地上の愛しき我が家、甘き我が家。私が長く夢見た桃源郷こそ我が家、甘き我が家。そこには何たる魅力的な響きが。そこには満ち足りた愛が。世界中で我が家ほど魅力的な所はない。
- 2 私の心は我が家を讃える、甘き我が家。私は我が家を愛のこもった眼差しで見ると、甘き我が家。そこには堅く結ばれた真実の約束が。そこでは心と心が結びつく。その他の世界は横に置かれる。我が家のため、甘き我が家。

原曲の歌詞が二連なのに対し、唱歌ではそれを三連に拡大している。原曲では SWEET HOME、すなわち愛の巣としての我が家が歌われており、二番の内容からして男女の恋愛の要素が内包されている。唱歌では、「み親の涙のなさは遍し」という歌詞内容からも、家族制度に基づいた「我が家」が歌われている。明治期の家制度は、前述の通り女性を中心としており、女性向けの「翻訳唱歌」として、相応しい改変と言える。次に男子向けの

「翻訳唱歌」である《尚武》をとりあげる。以下、これまでと同様に歌詞を記す。

《尚武》

一雄々しや大夫吾大君の、勅のまにまに山越え野ゆき、わが門過ぐれど内にも入らず、顧みせざらん妻も子をも  
二敵に向ひて後は見せず、進みて入るべし水にも火にも、皇国の爲には身をさへわすれ、劍の光を世にこそてらせ

《独立記念日》<sup>24</sup>

- 1 少年たちよ、道で叫ぶこの声は何なのか教えてくれ。皆が喜んでいるのが見える。(楽団はマーチを奏で、星条旗がひらめいている。海に岸に、我々皆が感謝する。独立記念日を再び。
- 2 百年近くが過ぎ、止まらぬ時の流れは海を変えた。我々の国で議決が行われ、この国は自由になった。楽団はマーチを奏で、星条旗がひらめいている。海に岸に、我々皆が感謝する。独立記念日を再び。
- 3 そのとき我々の国家は若く、伸ばされた魔手を打ち砕いた。血を流し、宣言を守り抜いた。独立した大地の上で。楽団はマーチを奏で、星条旗がひらめく。海に岸に、我々皆が感謝する。独立記念日を再び。

原曲は、ベルンハルト・クライン作曲の *Independence Day*。独立記念日の喜びを歌った曲だが、第2、3連では独立戦争の説明が入っており、その部分の歌詞イメージを改変したのが《尚武》だと考えられる。武勇に優れた無名の人物を描いた歌詞内容であり、男子向けの唱歌として典型的なものと言えよう。

『小学唱歌』におけるジェンダー観は、まず伊澤の分類による男女別楽曲から始まっているが、これは男女別学であった当時の授業形態を反映したものとも見なすことができる。歌詞におけるジェンダー像について、女子向けのものは「家」、「四季」、「実在の女性」など幅があるのに対し、男子向けのものは、そのほとんどが「自己犠牲」を歌ったものや軍歌調のものである。しかし、《母の思い》は、母への恩を歌っており、男子向けのものとしては例外的な歌詞内容と言える。これは明治時代、「賢母」という存在がいかに重要視されていたかということを示しているだろう。音楽要素においても、リズムを中心とした男女の違いが出てきており、特に後々の軍歌にもつながっていくという点で、男子向けの楽曲にピョコン節が多用されていることは興味深い。

#### 4. 結びに代えて

以上、伊澤修二が編纂の中心になった二つの唱歌集を、「ジェンダーの創出」という視点から論じた。「翻訳唱歌」の歌詞分析を中心に、音楽取調掛・伊澤修二らの後付けを見ることで、当時の日本で必要とされていた男女それぞれの人物像、ジェンダーに関する教育内容を考察することができた。歌詞内容におけるジェンダーについては、男性における「自己犠牲」や女性における「賢母」など、『小学唱歌集』で既に一定の型が出来ていたと見なせる。『小学唱歌』では、『小学唱歌集』の型を踏襲しつつ、特に音楽要素の面で新しいジェンダー観を取り入れていったと言えるだろう。1910年にイギリスで出版された、『この世の楽園 日本』で知られる英国人写真家のハーバート・ポンティングは、同書の第8章を「日本の婦人について」と題し、日露戦争前後の日本の女性像について詳しく記述している。その中で、小学校の女性教師が少女たちに対して「女にとっての最高の望みは、日本のために戦う息子の母親になることであり、あなた方が大きくなって自分の息子を持ったら、息子を陛下の勇敢で忠実な臣民に育て上げるようにして下さい」<sup>25</sup>と教える姿を描写しており、明治後期の小学校教育では、既にこのようなジェンダー観が根付いていたと考えられる。また、『小学唱歌』に関しては、『愛たの花』なども西洋曲を原曲としたものだが、残念ながら原曲不明のものが多く、歌詞の比較分析をあまり行うことができなかった。その原曲探索と歌詞の比較分析について、また、『小学唱歌』以降の明治期唱歌教育とジェンダーとの関連については、今後の課題としていきたい。

#### 注

- <sup>1</sup> 例として、2004年3月31日の産経新聞社説「小学校教科書 性差否定の浸透に警戒を」を挙げる。
- <sup>2</sup> 細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化4 学校唱歌2」『ミュージック・マガジン7月号』（株式会社ミュージック・マガジン、1989）pp. 96-97
- <sup>3</sup> 近藤鎮三訳「独乙教育書抄・女学校」『教育雑誌 第三号』（文部省、1876）pp. 6-7
- <sup>4</sup> 第1回「少年の国」より、2009年11月29日放映
- <sup>5</sup> 安田寛『仰げば尊し 幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』（東京堂出版、2015）pp. 310-360
- <sup>6</sup> 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、1967）pp.81-83
- <sup>7</sup> ただし、全く違う意味内容の歌詞に置き換わっていることもある。
- <sup>8</sup> 「西洋音楽の日本化・大衆化4 学校唱歌2」p. 98
- <sup>9</sup> 伊澤修二著、山住正巳校注『洋楽事始』（平凡社、1971）p.162より引用。以下、『小学唱歌集』の歌詞は、全て『洋楽事始』からの出典。
- <sup>10</sup> 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、1998）p. 34
- <sup>11</sup> 以下、『小学唱歌集』の原曲情報は『仰げば尊し 幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』による。原曲歌詞の翻訳は、全て佐藤によるもの。
- <sup>12</sup> W. H. Rogan, *A Pedlar's Pack of Ballads and Songs*, Edinburgh: William Paterson, 1869, p. 290

- 13 中村正道「善良ナル母ヲ造ル説」『明六雑誌 第三十三号』(明六社、1875)pp. 1-4
- 14 W. B. Bradbury, *The Alpine Glee Singer: A Complete Collection of Secular and Social Music*, New York: Newman and Ivison, 1852, pp. 125-126
- 15 “Annie Laurie”, *Vocal Melodies of Scotland*, London: C. Jefferys, n.d. 1835, [sheet music]
- 16 星野天知「清少納言のほこり」『文学界 第20号』(文学界雑誌社、1894)pp.1-5
- 17 “The Blue Bell of Scotland”, Philadelphia: Carr and Schetky, n.d. 1800, [sheet music]
- 18 金田一春彦『日本の唱歌〔上〕』(講談社、1977) pp. 34-35
- 19 江崎公子編『音楽基礎研究文献集 第17巻:「小学唱歌」全6冊掲載』(大空社、1991)を参照した。以下、『小学唱歌』における、楽曲歌詞の出典も全てここから。
- 20 伊澤修二「小学唱歌卷之四上」『音楽基礎研究文献集 第17巻』 pp. 20-21
- 21 現代の日本では、小学生のうちに変声する男子児童も珍しくないため、小学校音楽科の授業において変声期児童への配慮が必要になるが、戦前の日本では現代より変声期が遅かった。例えば、林義雄「変声期の取り扱い—声変わりを医学的に見る」『教育音楽 第5巻9号』(日本教育音楽協会、1950)pp. 31-34 では、1934年の調査結果として、15~16歳の男子における変声期の完了が、60パーセント程度であったことが記載されている。
- 22 伊澤修二「小学唱歌卷之六下」『音楽基礎研究文献集 第17巻』 pp. 11-12
- 23 <http://digitalcommons.conncoll.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1050&context=sheetmusic> (2016年5月30日に取得) 以下、『小学唱歌』の原曲情報は、長谷川由美子「明治期唱歌集における西洋曲の研究：付録2」(筑波大学博士学位論文、2012)による。
- 24 L.W. Mason, *The Fourth Music Reader*, Boston: Ginn and Heath, 1880, p. 322
- 25 ハーバート・G・ボンティング著、長岡祥三訳『英国人写真家のみた明治日本 この世の楽園・日本』(講談社、2005) pp. 262-263

## 主要な参考文献

- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会、1967年)
- ・金田一春彦『日本の唱歌〔上〕』(講談社、1977)
- ・大越愛子『近代日本のジェンダー 現代日本の思想的課題を問う』(三一書房、1997)
- ・上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社、1998)
- ・杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』(風間書房、2005)
- ・木村涼子編『日本の教育と社会 ジェンダーと教育』(日本図書センター、2009)
- ・安田寛『仰げば尊し 幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』(東京堂出版、2015)
- ・細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化4 学校唱歌2」『ミュージック・マガジン7月号』(株式会社ミュージック・マガジン、1989)

[Japanese School Songs in the Meiji Period and People Formation: Creation of Gender]  
 [Sato, Keiji・九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程・音楽教育学専攻]  
 [現在の研究テーマ：明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成]